

「赤城山北西麓における野生動物（シカ・イノシシ）の生態・行動調査及び侵入防護に関する研究」

群馬県立利根実業高等学校生物生産科生物資源コース2年 角田賢人也 他4名

1 はじめに

群馬県全体の被害は600haを超え、被害金額は5億円と増加しています。利根・沼田地区では100ha、6千万円の被害があります。

本校では、平成20年度より調査を開始し、野生動物侵入被害対策を地域農業の課題の一つとして取り組んでいます

2 研究目的

野生動物被害対策の知識と技術を習得し、研究成果を地域に普及させていく。

3 研究と実践

① 尾瀬からシカがやってきた（H20）

本校演習林にセンサーカメラを3基設置し調査を開始しました。イノシシ・クマ等の動物が生息していることが分かりました。一番驚いたことは、60キロ以上離れた尾瀬沼よりシカが移動してきていることでした。



② 被害対策に向けて私達にできること（H21）

群馬県農政部主催の研修会・実技講習会に参加し、基礎的な技術を習得しました。地域貢献として、片品村での電気柵設営、クマ用箱わなの製作と沼田市への寄贈、電気柵設営マニュアルの作成等地域貢献への一歩を踏み出しました。

③ 利根実業5層式侵入防護柵（H22・23）

赤城農場（昭和村川額）の被害現場に、「5層式侵入防護柵（**1層**：防獣ネット、**2層**：寒冷斜、**3層**：電気柵、**4層**：鷹の爪定植、**5層**：単管設置）」を考案し設置しました。

成果として、侵入被害が無くなりました。しかし、「どの層が、どのような効果があり侵入を防げたのか、科学的な分析が難しい。」等の評価をいただきました。

④ 回転まぶし式侵入防護柵（H24）

養蚕で廃材となっている「回転まぶし」を利用した侵入防護柵を考案し、赤城農場に設営しました。その結果、シカ・イノシシの侵入を未然に防ぐことができました。

日本獣医生命科学大学の加藤助教から、「シンプルで、科学的分析が可能である。侵入を防止できたのは、『立体的で、動く、形が変わることにより、動物が慣れにくい』からではないだろうか。」との評価をいただきました。



⑤ 簡易防護柵の設営実験・電気柵の検証（H24.10～）

演習林（昭和村赤城原）に隣接する採草地で、簡易防護柵の有効性と電気柵の効果について調査しました。簡易防護柵は、2ヶ月間効果がありました。

また、電気柵は、動物に「慣れ」が生じ、「危険」を認識しなくなると効果が弱まること。「電気柵を設置したから大丈夫」ではなく、メンテナンスが重要であること等が分かりました。

⑥ イノシシの生態把握と対策技術の向上 (H24. 10～)

演習林で、イノシシの防護方法を研究しました。「忌避剤を散布し、軍手に浸みこませたら効果があるのではないか。」と考え、軍手式防護柵を設置しました。

忌避剤は、「鷹の爪」よりカプサイシンを抽出し利用しました。「軍手柵があるからイノシシが来ない」可能性があるので、侵入があつてから散布しました。

軍手柵内への侵入は 58 日間ありませんでした。侵入後、カプサイシン散布し 50 日間侵入を防げました。

⑦ 回転まぶし式侵入防護柵の改良 (H25. 6～)

採草地・演習林での実験データをもとに「回転まぶし式侵入防護柵」の改良を行いました。「回転まぶし」を軽量化し回転を速めました。また、カプサイシンを散布できるように「軍手柵」を取り付けました。現在、野生動物の侵入を未然に防いでいます。

⑧ 実験の継続

本年度も実験を継続し、科学的なデータ取得を目指して「ロープ式防護柵」の実験等を行っています。

4 今後に向けて

研究を通し被害防止に必要なことは、「ワイルドライフマネジメント（野生動物保護管理）」の観点から、科学的な調査と分析を行い、①野生動物の生息状況を把握すること、②動物の性格と習性を理解すること、③生息地域を調整すること、④研究を継続し被害を未然に防いでいくことです。

野生動物被害対策の課題として、意識が高い人と低い人との温度差があります。「高い人」は被害対策について真剣に耳を傾けてくれます。一方で、「低い人」は「多めに作付けすればよい」、「侵入したことがないから大丈夫」、「電気柵を付けたから動物は侵入しない」と考える人も見られます。この解決策として、利根・沼田地域の市町村や関係機関、中学校、農家などでスライドによる研究成果を発表し啓発活動を行っています。

また、地域連携活動として下草刈や間伐作業等を行い、緩衝地帯をつくり生息地域の調整活動も行っていきます。

今後もこのような活動を継続し、研究成果を地域に普及させていきたいと考えています。

